

談話主題の階層性と表現形式

砂 川 有里子

0. はじめに

本稿の目的は、談話主題の階層性が書き言葉に記号化されるありさまを記述することである。談話には、話し言葉であれ書き言葉であれ、包括的に談話を結束させる上位の主題のもとに、より狭い範囲の結束にあずかる下位の主題が存在する。このような談話の階層構造を反映する言語形式を解明する方法として、本稿では説明文を用いた反復語彙の分布調査・要約調査・タイトル調査といった3つの調査と、テキストの質的な分析を通じたマクロ構造の記述という方法を用いることにする。その結果の考察を通じて、同一指示語の反復、省略や名詞などの同一指示形式、格表示や主題表示に関わる文成分の機能、文の構造などのさまざまな手段が、談話の階層構造を記号化するために用いられていることを明らかにする。

1. 文の主題と談話の主題

文の主題を表すには「は」「って」「ったら」「なら」などの形式がある。しかし、文の中で常に明示的に主題が表現されるとは限らない。次の(1b)~(1d)では主題を示す形式が含まれていないが、これらの文も(1a)(1e)と同じく「吾が輩」に関する記述を行っており、「吾が輩」を主題として持つ文であると理解できる。

- (1) a. 吾輩は猫である。
 b. 名前はまだ無い。
 c. どこで生まれたか頼と見当がつかぬ。
 d. 何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いて居た事丈は記憶して居る。

e. 吾輩はここで始めて人間というものを見た。〔吾輩は猫である〕
 先行談話で示された主題に近接しており、表現されなくても容易に理解できるときは、(1 b)~(1 d)に見られるように、主題が省略されるのが普通である。
 ところで、(1)の5つの文はすべて主題を有する文であったが¹⁾、文の中には主題を持たない無題文もある。例えば次の文は、現象を話し手の判断を加えずにありのままに記述する現象文と呼ばれるタイプの無題文である。

(2) あれ、雨が降ってきたよ。

無題文は、文レベルでは主題を持たない文であると言える。しかし、文を超えた談話レベルにおいては、主題に深く関与することがある。次の例を見てみよう。

(3) くまさんが、ふくろをみつけました。

「おや、なにかな。いっぱいはいっている。」

くまさんが、ともだちのりすさんにききにきました。

くまさんが、ふくろをあけました。なにもありません。

「しまった。あながあいていた。」

あたたかいかぜがふきはじめました。

ながいながいはなのいっぼんみちができました。

(〔こくご一上〕光村図書)

(3)において「くまさん」が重要な主題となっていることは、誰でも認めるところだろう。しかし、(3)の地の文は全て現象文で構成されており、「くまさん」という名詞が何らかの主題標識を伴って表されているわけではない。ここでは「くまさん」という名詞が繰り返し用いられ、「くまさん」の行動や思考内容が重ねて記述されることによって、これら一連の文が「くまさん」に関するひとまとまりの談話を構成しているという理解が生まれるのである。

もうひとつ無題文が談話主題を表す例として、次の文の連なりを見ることにしよう。

(4) a. はとがありを見つめました。

↓
 b. ありは木の葉につかまりました。

↓
 c. 木の葉は船になりました。

(〔こくご三上〕光村図書)

(4 a)も現象文であるが、ここではこの文によって、それ以降の談話で主題となる「あり」が導入されている。Dik(1989)はこの種の表現が持つ機能を「New

Topic' と呼ぶが、この場合の 'Topic' は、明らかに(1)で見た文の主題とはレベルの異なる談話の主題に関する概念である。

ところで、(4 a)で導入された主題の「あり」は、(4 b)では「は」という主題標識を伴って表されている。しかし、この主題は、(1 a)での主題が後続談話に語り継がれていったのとは対照的に、それ以降の談話に継続することなく、直後の(4 c)において(4 b)で新たに導入された「木の葉」に主題の地位を譲っている。主題標識を伴った指示対象が、必ずしも安定した談話主題になるとは限らないのである。

このように、ある指示対象がそれ以降の談話で語り継がれるかどうかは、ひとえに話し手の選択に拠るものである。しかし、語り継がれる可能性を予測する手掛かりは、何らかの形で言語表現に与えられているはずである。2節以降ではどのような表現が主題の予測と関わりを持つか、主題の特質がどのように言語表現に反映されるかといった問題について考察することにしたい。

ところで、談話の主題というのは、その談話において談話参加者の意識が向けられる指示対象であると言える(Chafe 1987)。談話参加者の関心は、談話の展開に沿って絶えず変化し続けるものであるが、その過程においては、比較的継続的に関心が向けられる対象がある一方で、一時的な関心を引くだけの対象もある。主題構成に関わるこのような認知状態の異なりを記述するためには、「主題性」という概念を立てることが必要となる(Givón 1983)。すなわち、主題性が高いものはより安定した主題、低いものは一時的、局所的な主題である。安定した主題は広範囲にわたって包括的に談話を結束させる上位の主題である。談話の構成としては、このような上位の主題の下により狭い範囲で現れる主題が位置づけられ、その下にはさらに局所的な主題が存在するといった階層構造が考えられる。このような階層構造を意識の活性化状態という観点から捉えなおしてみると、局所的な主題は意識の表面で活性化され続け、それが終わった段階で主題の地位を退くが、包括的な主題の方は常に活性化され続けているわけではなく、いつでも呼び起こせる半活性化状態で意識の周辺に蓄えられている場合が少なくないのではないかと、ということが予想される(Chafe 1994)。この予想の妥当性については、5節におけるテキスト分析を通じて検証することにしたい。

以上、文の主題と談話の主題について、また談話の主題の階層構造について論じてきた。以下においては談話の主題が言語表現の上でどのように現れるかを観察し、主題の階層性と言語表現との関わりについて考察することにしたい。

2. 同一指示語の反復

談話の階層構造を記述するためには同一指示語の連鎖を観察することが有効な手段となる。何回も繰り返し出現する同一指示語は主題性の高い指示対象であると予測できるからである。このような観点から語の反復を考察した研究に馬場(1986, 1989)を挙げることができる。馬場は反復語の間に存在する主題性のちがいを客観的に記述しようと試み、新聞や雑誌から選んだ書き言葉を資料として、語の反復調査を行った。そして、反復語がテキスト全体にわたって出現し、なおかつ反復頻度が高いものを「主要反復語句系列」、反復語がテキストの一部に出現し、その部分内で反復頻度が高いものを「部分反復語句系列」と名付け、それらの違いが、テキスト全体の主題か、一部分の小主題かといった主題性の違いを反映するものであることを主張した。

以下においては、馬場の手法を用いて反復語の調査を行い、その手法の妥当性について検討する。そして、主要反復語句系列と部分反復語句系列の上に述べた記述が、言語表現に反映された談話主題の階層性のある程度正しく示していると思われるものの、馬場の提唱する算出法による主要反復語句系列・部分反復語句系列の判定とは食違うものであり、判定方法そのものに問題があることを明らかにしたい。

まずは馬場の手法に従った筆者による調査結果を分析することにするが、馬場の手法では反復の回数を正しく読みとるという点においていくつかの問題があると思われるので、本稿では次のような修正を加えた方法を用いることにする。

一つは、語の反復を観察する単位を、文から節に変更するという点である。馬場は語の反復を数える単位として文を用いているが、そのやりかただと、いくつもの節からなる長大な複文も、きわめて短い単文も、区別なく同じ数値で扱われてしまう。それを避けるために、本稿では節を単位として用いることとしたい。話し手の目下の関心が向けられ、活性化された対象が会話で表現されたときの単位として Chafe(1980) はイントネーション・ユニット (IU) を設けているが、その IU に相当する書き言葉の単位には、ベケシュ(1989)が主張するように、節を当てるのが適当であると思われるからである。

もう一つの変更点は、反復の中に省略を含めることである。(1)の例でも見たとおり、言語表現上は明示されていなくても、ある指示対象が主題として維持されている場合は少なくない。そこで、本稿では省略されていると思われる

箇所も反復とみなして、反復回数に加えることにする。具体的には、同じ指示対象を表す名詞、指示詞、省略が出現した節の総数を反復回数とする。

さて、馬場は主要反復語句系列と部分反復語句系列の判定法として、「反復距離」「区間密度」「全体密度」という量的な基準を用いている。本稿ではこれら3つの尺度を、上記2点の変更を加えて以下のように用いることにしたい。

- ・反復距離＝ある指示対象が最初に出現した位置から最後に出現した位置までの節の数。
- ・区間密度＝反復距離に対する反復回数の比率（反復回数÷反復距離×100）。
- ・全体密度＝テキスト中の節の数に対する反復回数の比率（反復回数÷テキスト中の節の数×100）。

馬場は、以上3つの数値の組み合わせから、主要反復語句系列と部分反復語句系列を判定する。その方法は以下の通りである。

- ・反復距離と全体密度のどちらも高ければ「主要反復語句系列」で、テキスト全体にわたって重要な位置を占める包括的な主題を表している。
- ・反復距離が中位で、区間密度が高ければ「部分反復語句系列」で、テキストの一部で重要な主題となる局所的な主題を表している。

以下においては、筆者が行った反復語彙分布調査の結果から主要反復語句系列と部分反復語句系列を判定し、その結果を要約調査、タイトル調査の結果とつきあわせることによって、馬場の手法の妥当性を検討することにした。結論を先取りすると、以上のような方法で判定された主要反復語句系列は、必ずしも包括的な主題を表すものではなく、また上記の判定による部分反復語句系列は、必ずしも局所的な主題を正しく言い当てるものとはならないことを論じていく。

3. 調査テキストと判定法

筆者の調査で用いたのは、一般読者を対象とした「クスリに関する11章」(『暮らしの手帖54』1995年2・3月合併号)という平易な説明文である。このテキストは全体で1万3千字弱の長さを持つが、調査には冒頭の670字分を使用する。この部分は、飲み薬、注射、坐薬など、種々あるクスリのうちの飲み薬についての説明が書かれた箇所であり、「飲み薬」という上位の主題のもとに、ひとまとまりの談話を構成していると認められるものである。

節の判定基準はおおよそのところベケシュ (1989) に従った。すなわち、

- 1) 句点がある箇所は節の切れ目と見なす。
- 2) 連用中止による切れ目があるときは節の切れ目と見なす。
- 3) 接続助詞や接続助詞相当の語句を伴った従属節は節と見なす。
- 4) 引用節は節と見なす。
- 5) 連体修飾節は節と見なす²⁾。

ただし次の点では異なっている。

- 6) 主題成分、状況成分などが二つ以上の節にかかるとき、ベケシュはその成分を単独の節と認めているが、本稿では二つ目の節で当該成分が省略されていると見なすため、その成分だけを単独の節と判定することはしない。例えば、次のテキストは、(5 a)のように4つに分けるのではなく(5 b)のように3つに分節する。省略されていると考えられる箇所は () で示してある。

(5) a. ¹⁾顆粒状のクスリは、²⁾こまかな粒になっていて、³⁾非常に溶けやすいので、⁴⁾胃の中でサーッと溶けます。

b. ¹⁾顆粒状のクスリは、こまかな粒になっていて、²⁾(顆粒状のクスリは)非常に溶けやすいので、³⁾(顆粒状のクスリは)胃の中でサーッと溶けます。

また、「糖衣錠というツルツルした錠剤」に見られる「という」や「ツルツルした」という形容詞的な動詞表現は節と見なさないことにした。

以下に、調査に使用したテキストに節の番号をふったものを掲げることにする。

テキスト原文

¹⁾クスリは飲むのが²⁾いちばん手軽です。³⁾食べものと同じように、⁴⁾口から入れるだけですから、⁵⁾クスリをつくる時には、⁶⁾基本的に飲んで⁷⁾効くように⁸⁾考えています。

⁹⁾飲むクスリには、顆粒や錠剤、カプセルなど、いろいろな形がありますが、¹⁰⁾クスリを効かせる¹¹⁾目的によって、¹²⁾それぞれに設計されています。

¹³⁾顆粒状のクスリは、こまかな粒になっていて、¹⁴⁾非常に溶けやすいので、¹⁵⁾胃の中でサーッと溶けます。¹⁶⁾出来るだけ早く効かせたい¹⁷⁾クスリは、だいたい顆粒状です。¹⁸⁾飲むと¹⁹⁾すぐ胃で溶けますから、²⁰⁾胃壁を保護したり、²¹⁾強い胃酸を中和させたいときには、²²⁾とくにいいのです。

¹²³胃でも働いてほしいけれど、¹²⁴腸のほうにも効かせたいというときは、¹²⁵二層錠、三層錠という、切ってみると¹²⁶層になっている¹²⁷錠剤を使います。¹²⁸だいたい三層錠が多いのですが、¹²⁹上と下の層は胃ですぐとけて、¹³⁰まん中は、腸までいって¹³¹溶けます。¹³²「胃で働いて腸で効いて」というコマーシャルがありますが、¹³³そういうのは、この三層錠です。

¹³⁴いちばんよくあるのは、¹³⁵糖衣錠というツルツルした錠剤ですが、¹³⁶これは単に飲みやすくするために、¹³⁷お砂糖でかためてあるのではありません。¹³⁸胃にはいって¹³⁹すぐにこわれないために¹⁴⁰固めてあります。

¹⁴¹それをもっと徹底させたのが¹⁴²カプセル剤です。¹⁴³腸溶錠と違って、¹⁴⁴胃の酸で壊れないように、¹⁴⁵顆粒剤をゼラチンのカプセルで保護したのも¹⁴⁶あります。

¹⁴⁷クスリの形は、どこで、どのくらいで溶けるかということを¹⁴⁸きちんと設計して¹⁴⁹つくってあるのですから、¹⁵⁰飲みにくいからと、¹⁵¹自分でカプセルをあけて、¹⁵²中のクスリを出したり、¹⁵³錠剤をくだいたりして¹⁵⁴飲むというものは、¹⁵⁵まちがいのもとです。

以上のテキストを用いた3つの調査を4節と5節で紹介し、その結果を用いて馬場の手法を批判した上で、筆者の手法にもとづいて談話主題の階層性について考察を進めることにしたい。

4. 反復語彙分布調査

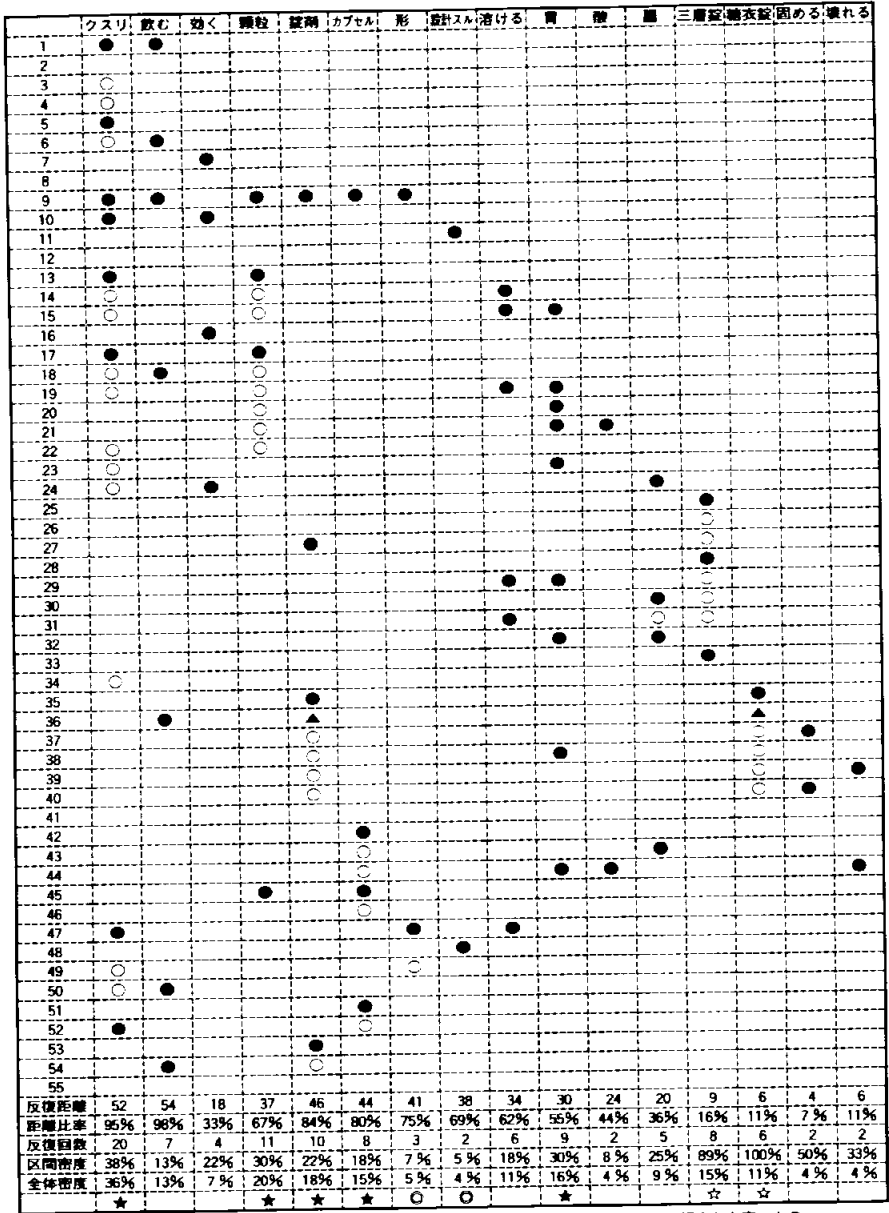
この調査では、馬場の調査法にならい、テキスト原文中に2回以上現れた語の分布を示し、区間密度と全体密度を算出した。表1がその結果を示したものである。語の配列はテキスト原文での出現順序に従っている。

まずは反復距離、区間密度、全体密度の3つの尺度を用いて、主要反復語句系列と部分反復語句系列を判定することにしよう。

表の中で反復距離、全体密度ともかなり高い数値を示すのは、「クスリ」「顆粒」「錠剤」「カプセル」の4つである。「胃」もそれに次ぐものとして比較的高い数値を示しているので、それも含めて主要反復語句系列と認めておくことにする。

ここで気づくことは、「顆粒」「錠剤」「カプセル」の場合、反復距離が長いとはいうものの、反復が集中する箇所は一部に限られており、「クスリ」や「胃」

表1 テキストの反復語彙分布状況



●…名前または動詞 ○…省略 ▲…指示詞「コレ」 ☆…反復距離・全体頻度とも高いもの
 ☆…反復距離が中くらいで区間頻度が高いもの ○…区間頻度・全体頻度とも低いもの

のようにテキスト全体にまんべんなく分布しているのとは違うということである。視覚的に分布を判定するなら、これらはむしろ、部分反復語句系列と認めるべきではないかと思われる。しかし、中位の距離のものを部分反復語句系列と認めるという馬場の手法では、これらの語は反復距離が長いために、部分反復語句系列と認めるわけにはいかなくなる。また、部分的にはきわめて密に繰返されているにも関わらず、反復距離の数値の高さによって区間頻度の数値が相対的に低まってしまうのも問題である。つまり、区間頻度の数値から「顆粒」「錠剤」「カプセル」の密集状態を正しく読みとることはできないわけである。

一方、「三層錠」と「糖衣錠」は局所的に高い頻度で集中し、反復距離が総じて短いため、区間密度が極めて高くなっている。部分反復語句と言うのにまさにふさわしいものであると思われるのだが、テキスト全体の16%や11%という距離比がはたして「中位の距離」と言ってよいのかどうかということになると、納得できる客観的な根拠は見いだせない。結局は、これらが典型的な部分反復をなしているからこの程度の距離を中距離と認めようといった循環論に陥ってしまい、客観的であるはずの数値が全く意味をなさなくなってしまうのである。

さらに、区間密度と全体密度の数値から主要反復語句系列と判定され、主題性の高い指示対象を表しているとされた「胃」に関しては、後に述べる要約調査、タイトル調査によると、主題性が低いという正反対の結果が出てしまう。反対に、要約調査、タイトル調査によって主題性が高いと判定される「形」や「設計」は、区間頻度も全体頻度もきわめて低いために、主題性が低いと判定されるといった矛盾が起こる。馬場（1986）もその点には気づいており、永野（1972）の「主要語句の連鎖」と比較して、永野の概念で捉えられるはずの主題が、馬場の主要反復語句系列によっては捉えきれないものであることを論じている。問題の「形」や「設計」は、馬場が正しく捉えられないとしたうちの「ある事物・事柄を具体化あるいは抽象化した語句（馬場1986：p.82）」に属するものである。

以上のことから、全体密度、区間密度、反復距離といった数値は、主題性を正確に判定する基準とはなり得ないと結論付けることができる。すでに述べたように、この種の数値に頼るよりは、むしろ視覚的に分布状況を観察しただけの方が正確な判定ができるのではないかと思うのである。もちろん、表1のような分布の有様を、統計的手法を用いることによって数値的に記述する、ということではできるだろう。しかし、そこまで大がかりなことをしなくても、おお

よそのところは視覚的判断で十分事足りるのではないかと筆者は考える。そこで、以下においては区間密度・全体密度などの数値は用いずに、単に視覚で捉えた分布の状況をもとにして考察を進めることにしたい。次節では要約調査とタイトル調査の説明を行い、その結果をテキスト原文の反復語彙分布状況と照らし合わせながら、指示対象の主題性とそれを表す言語表現との関連について考察することにする。

5. 要約調査とタイトル調査

これらの調査は、大学生と大学院生を合わせた50名の学生を対象とし、上に掲げたテキスト原文(節番号を除いたもの)を読みながら53文字(全体の8%)の枠内で要約文を作り、文字数無制限でタイトルを考えるという作業をさせたものである。ここでは、それぞれの調査を「要約調査」「タイトル調査」と呼ぶことにする。どちらの調査も、その目的は、要約文やタイトルに使用された語の頻度を手掛りにして、主題性の高い語を特定することである。

調査の結果、前節で述べたように、主題性が高いとされたにも関わらず、テキスト原文においては反復回数が少ない「形」や「設計」のような語があったり、逆に要約調査・タイトル調査で主題性が低いと認められたにもかかわらず、テキスト原文では反復回数が多い「胃」のような語のあることが明らかになった。まず、要約調査のほうから見っていくことにしよう。

要約調査の結果は表2に示した通りである。表には50人分の要約文中に4回以上用いられた語を使用頻度の高い順に並べてある。

要約文はテキスト全体を8%以下のサイ

表2 要約文の語彙使用頻度

順位	語	頻度
1	クスリ	63
2	飲む/飲み	56
3	形/形状/形態	42
4	効用/効き目/効果	37
5	顆粒	36
6	設計	33
7	目的/用途	31
8	ある	23
9	いろいろ/さまざま	19
10	カプセル/カプセル剤	18
11	溶ける	16
12	錠剤	15
13	作る	13
14	どこで	11
15	考える	10
15	それぞれ	10
17	変える	8
18	まちがい	7
19	基本	6
19	きちんと/正しく	6
19	どのくらい	6
22	腸	5
23	胃	4

ズに凝縮したものであるから、当然のことながら、重要でない語は排除され、テキスト全体を包括的にまとめ上げるマクロの主題と関連の深い語だけが残される。また、要約文に残された回数が多ければ多いほど、テキスト全体にとっての重要性が高いものであると推測できる。ここで「テキスト全体にとっての」と断ったのは、たとえ局所的にきわめて主題性の高い指示対象が存在したとしても、テキスト全体の中ではそれほど重要ではない場合があり得るからである。

以上のことから、表2の上位の語をつなぎ合わせれば、テキスト全体の重要な主題を盛り込んだ文ができると考えることができる。とりあえず、上位10位までの語によって文を組立ててみることにしよう。(6)のカッコ内の数字は使用頻度の順位である。

(6) 飲む₂クスリ₃には、顆粒₅やカプセル₁₀などのいろいろ₉な形₈がある₁₁が、効用₄という目的₇によって設計₆されている。

これをテキスト原文と比べてみると、原文の9節目から12節目までの次の文とほぼ相似形をなすものであることが分かる。その部分を次に示す。

(7) 飲むクスリには、顆粒や錠剤、カプセルなど、いろいろな形がありますが、クスリを効かせる目的によって、それぞれに設計されています。

すなわち、(7)に示した部分は、テキスト全体の主題を一文に凝縮したトピックセンテンスであると言える。このテキストにおいては、トピックセンテンスを比較的初期の段階で用いているわけであるが、さらにテキストを読み進めていくと、トピックセンテンスの内容の一部が、最後の段落で再び繰り返されていることが分かる。以下の下線部がそれに当たるが、この部分では、(7)から「顆粒」などの具体例を差し引いた内容が表されている。

(8) クスリの形は、どこで、どのくらいで溶けるかということをきちんと設計してつくってあるのですから、飲みにくいからと、自分でカプセルをあけて、中のクスリを出したり、錠剤をくだいたりして飲むというのは、まちがいのものです。

(7)の「クスリを効かせる目的」の内容は、それ以降の展開部でクスリのタイプ別に具体的に説明されることになるのだが、その内容を受けて、終結部の(8)では「(クスリが)どこで、どのくらいで溶けるかということ」という表現に言い換えているのである。全体の主題に関わる内容が、終結部において再び提示されることによって、テキスト全体の結束性が強められ、それと同時に、その主題に関わる警告をなめらかに導き出す役割を果たしているものと考えられる。

次にタイトル調査の結果を紹介することにした。

この調査では特に文字数を指定しなかったために、最小5文字から最大24文字までのタイトルを得た。50人分の平均文字数は11文字である。表3にタイトルにおいて使用された語の全てと、その回数を頻度順に表示した。

タイトルは要約文よりもさらに凝縮されたサイズなので、きわめて上位の主題に関わる語しか残されないことが予想される。表2と表3をつきあわせると、タイトル調査の上位3位までは要約調査の結果と全く同じである。このことから、上記の予想にかなりの妥当性を認めてよいように思う。そこで、表3の上位3位までと、さらに拡張した5位までの語を使ってタイトルを作ってみることにする。

(9) a. 上位3位まで 「飲み薬の形」

b. 上位5位まで 「効かせる目的による飲み薬の形」

(6)の要約文と比べると、「顆粒」や「カプセル」といった具体例が割愛され、さらに凝縮された要約がなされていることが分かる。

ところで、要約文とタイトルで第3位を占める「形」という語は、原文では3回しか出現しない(表1参照)。上位の主題は「クスリ」のようにテキスト全体にわたって何回も出現するものがある一方で、「形」に見られるように出現回数がかきわめて限定されるものもあるのである。「形」の内容は、具体的には顆粒や錠剤やカプセルといった薬剤の形態を指すが、これらの薬剤のひとつひとつは、テキストの局所的主題として順次活性化され、その役が終われば意識から遠ざけられる。それに対して、より上位の概念である「形」のほうは、上記の薬剤が出現するたびに間接的に呼び起こされて、半活性化された状態で意識の周辺に保ち

表3 タイトルの語彙使用頻度

順位	語	頻度
1	クスリ	50
2	飲む	36
3	形/形状	33
4	目的	15
5	効用/効果/効く	13
6	種類	9
7	設計	7
8	構造	4
8	機能/働き/働く/役割	4
10	いろいろ/さまざま	3
10	意味	3
10	変わる/異なる	3
13	どうして/理由	2
13	それぞれ	2
13	関係/関連	2
16	ある	1
16	使う	1
16	用途	1
16	応じる	1
16	合う	1
16	持つ	1
16	場所	1
16	方法	1

続けられるのである。上位の主題はむしろ、このように抽象化された形で継続的に記憶に残り続けることが多いのではないと思われる。

このことから、主題の階層構造は、以下のような認知状態で把握されているものと考えられる。つまり、テキスト全体を包括する上位の談話主題は、必要ときにはすぐさま活性化できる半活性化された情報として意識され、安定的・継続的に談話参加者の意識の周辺に存在する。それに対して局所的な談話主題は、談話参加者の意識の中で活性化されているが、その指示対象が言及されなくなるとともに、意識の表面から薄れ、半活性的ないしは不活性的状態となってしまう。したがって、局所的な主題を呼び出すには、ふたたび明示的な言語表現によって指示する必要があるわけであるが、包括的な主題を呼び出すには、必ずしも明示的な表現が必要ではない。22～24節、あるいは34節における「クスリ」は、近接する先行談話に同一指示表現が出現していないにも関わらず、省略形式で表されている。それに対して、顆粒、錠剤、カプセルを新たに呼び出す場合は、たとえば9、27、35、53節の「錠剤」のように、必ず名詞を用いて明示的に表現されていることが観察される（表1参照）。認知的処理の負担の少ない上位の主題は省略され、負担の大きい下位の主題は明示されているわけである。

さて、前節ですでに述べたことであるが、「胃」は、要約調査の順位では非常に低い位置にあるし、タイトル調査では一度も用いられていない。このことから、「胃」の主題性はそれほど高いものではないと考えられる。それにもかかわらず、テキスト本文中に何度も反復され、しかも、かなり広範囲にわたって出現するのはなぜなのだろうか。次節では、テキスト原文を質的に分析することによって、テキストの階層構造における「胃」の位置づけについて、検討してみることにしたい。

6. テキストのマクロ構造

ここでは、要約調査とタイトル調査の結果を手掛りとしつつ、テキスト原文の解釈と分析という質的な手法を用いることによって、テキストのマクロ構造 (van Dijk 1977) の記述を試みたいと思う。

まず、(7)のトピックセンテンスと(9)のタイトルとを手掛りとして、このテキスト全体を包括的にまとめ上げるマクロの主題を考えてみよう³。

(10) 〈トピックセンテンス〉

飲むクスリには、顆粒や錠剤、カプセルなど、いろいろな形がありますが、クスリを効かせる目的によって、それぞれに設計されています。

〈タイトル〉

効かせる目的による飲み薬の形



(11) 〈マクロ主題〉

クスリは、いろいろな形があり、効かせる目的によって設計されている。

上記の主題のもとで、テキストがどのように開始・展開・終結されるのか、冒頭から順を追って確認することにしよう。122～123ページのテキスト原文を参照されたい。

まず、冒頭の8節までの記述で、「飲み薬」という主題の導入と、「飲んで効くように作る」という「効かせる目的」にかかわる内容が導入されている。それに続く9節からのトピックセンテンスで(11)のマクロ主題が示される。このマクロ主題によって「いろいろな形」にはどんな形があるのか、また「効かせる目的」とはどんな目的であるのか、という課題が導かれるわけである。本論での議論に対する課題が設定されるこの部分までを導入部と考えておいてよいだろう。次の13節から展開部となるが、そこでは上記二つの問いに対する解答が与えられるという形で議論が展開される。その部分を少し詳しく観察してみることにはしたい。

「いろいろな形」にどんな形があるのかという問いに対しては、すでにトピックセンテンスによって「顆粒」「錠剤」「カプセル」という答えが与えられている。「効かせる目的」とはどんな目的か、という問いに関しては、具体的には「どこで溶けるのか」、さらに具体的には「胃で溶けるのか、腸で溶けるのか」という問いであることが、読み進んでいくうちに理解できる。この問いは、終結部に至って初めて「どこで、どのくらいで溶けるのか(47節目)」という表現によって示されることになるが、それ以前の展開部では明示的に示されておらず、「顆粒」、「錠剤」、「カプセル」という局所的な主題について論じる中で、上記の問いに対する答えがひとつひとつ明らかにされていくという形をとっている。それによって、「顆粒の場合は胃」「錠剤の場合は、三層錠では胃と腸、糖衣錠では腸」「カプセルの場合は腸」で溶けるという答えが与えられるのである。

以上の展開部を経ていよいよ終結部となるが、そこではマクロ主題の一部が

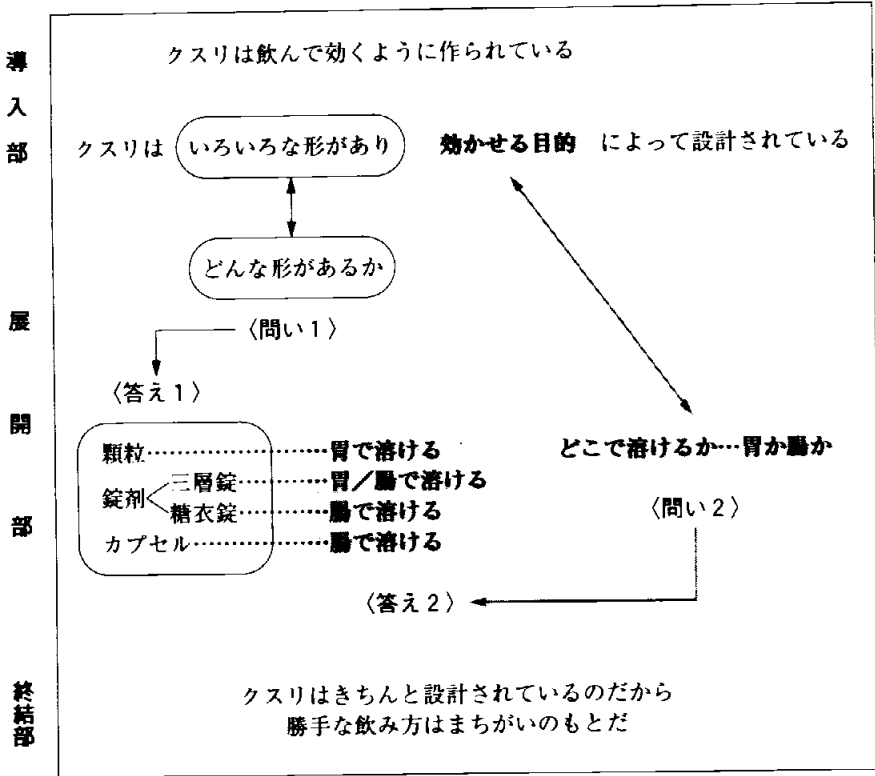


図1 テキストのマクロ構造

繰返され、勝手な飲み方をいさめる警告が行われて、テキストが結ばれている。

以上に述べたテキスト原文のマクロ構造を図で示すと上の図のようになる。

ところで、「顆粒」「錠剤」「カプセル」は「クスリにどんな形があるか」という問いに対する答えであると同時に、「それらのクスリはどこで溶けるか」という問いの形成にも関与している。前者の質問では問いの焦点「どんな形」の部分に当たるが、後者の質問では「～は」という文の主題に位置づけられるのである。

それに対して、「胃」と「腸」は「どこで溶けるか」という問いに対する答えとなるだけで、質問文の主題には関与しない。このテキストの中では常に問いの焦点として提示されているのである。

ここで着目したいのは、表1に並んだ●印が示すとおり、「胃」が出現するときは必ず名詞の形を取っているということである。「腸」についてもほぼ同じで、5回のうち4回は名詞が繰返されており、省略は1回しか見られない。これは「胃」や「腸」が問いの焦点をなしていることに起因する当然の現れで、久野(1978)が指摘するように、情報の焦点が省略されることは許されないためである。

7. 主題の導入形式

ここでは、「クスリ・顆粒・錠剤・カプセル・三層錠・糖衣錠・胃・腸」の8語を選び、それらが名詞や指示詞で表現されるときに、どのような助詞を伴うか、あるいはどのような構文で用いられるか、という点について観察したい。この8語を選んだ理由は、図1に示したマクロ構造において、これらの語が表す指示対象が問いに対する答えという重要な役割を果たしているが、マクロ主題とのかかわりに関してはそれぞれ異なった位置づけがなされていると考えられるからである。以下においては、上記の語がテキストに導入されたり、再設定されたりするときに用いられた表現形式を観察することによって、主題を予測する手がかりがどのような表現形式に認められるのかを明らかにしたい。

表現形式の観察にはいる前に、マクロ主題とのかかわりにおける指示対象の重要性について確認しておくことにしたい。上記8語のうちタイトル調査で用いられたのは、「クスリ」1語のみで、この語が最上位の位置を占めていることは間違いない(表3参照)。要約調査で用いられていたのは頻度順に並べると「クスリ・顆粒・カプセル・錠剤・腸・胃」である(表2参照)。「顆粒・カプセル・錠剤」と「腸・胃」の間には頻度の格差があることから、重要性に差があると判断できる。「三層錠・糖衣錠」は要約文にも用いられておらず、重要性はきわめて低いと言える。以上の観察からマクロ主題との関わりにおいて重要性の大きい順に並べると、次のようになる。

(12) クスリ>顆粒・カプセル・錠剤>腸・胃>三層錠・糖衣錠

さて、表4は、上記の語の分布状況と、それらが名詞や指示詞で示されるとき表現形式を示したものである。この表をもとに、指示対象がテキスト内に初めて導入されるとき、長い距離にわたって連続して出現するときの表現形式を抽出し、リストを作成したものが表5と表6である。ここではこれらの表を手がかりとして、主題の階層性と表現形式との関連について考察することに

表4 原文の反復語彙表現形式

	クスリ	顆粒	錠剤	カプセル	胃	腸	三層錠	糖衣錠
1	●ハ							
2								
3	○							
4	○							
5	●ヲ							
6	○							
7								
8								
9	飲む●ニハ	●や…ガ	●…ガ	●など、いろいろな形ガ!				
10	●ヲ							
11								
12								
13	顆粒状の●ハ	●状のクスリハ						
14	○	○						
15	○				●の中デ			
16								
17	●ハ	●状デス						
18	○	○						
19	○	○			●デ			
20		○			●錠ヲ			
21		○			●粒ヲ			
22	○	○						
23	○				●デモ			
24	○					●のほうニモ		
25							●という…ヲ	
26							○	
27			●ヲ					●が多い
28					●デ			
29						●マデ		
30						○		
31					●デ	●デ		
32							●デス	
33								
34	○							●という…デス
35			フルフルした●デス					
36			▲ハ					▲ハ
37			○					
38			○		●ニ			
39			○					
40			○					
41								
42				●デス		●溶錠ト		
43				○				
44				○	●の錠デ			
45		●剤ヲ		●デ				
46								
47	●の形ハ							
48								
49	○							
50	○							
51				●ヲ				
52	●ヲ			○				
53			●ヲ					
54			○					
55								

●…名詞 ○…省略 ▲…指示詞「コレ」

表5 指示対象の導入形式

出現位置	助詞／文のタイプ	表現形式	指示対象
1 節目	ハ	●は	クスリ
9 節目	ガ	●…があります	顆粒・錠剤・カプセル
15 節目	デ	●の中で	胃
24 節目	ニモ	●のほうにも	腸
25 節目	ヲ	●という…を	三層錠
35 節目	コピュラ文の述部	●という…です	糖衣錠

●…名詞

表6 密集開始の表現形式

出現位置	助詞／文のタイプ	表現形式	指示対象
17 節目	コピュラ文の述部	●状です	顆粒
28 節目	ガ	●が多い	三層錠
35 節目	コピュラ文の述部	ツルツルした●です	錠剤
35 節目	コピュラ文の述部	●という…です	糖衣錠
42 節目	コピュラ文の述部	●です	カプセル

●…名詞

したい。はじめに表5から観察することしよう。

表5は、上記の指示対象がテキスト内に初めて導入されるとき形式を示したものである。最上位の主題である「クスリ」は「は」を伴い、次に続く「顆粒・錠剤・カプセル」は「が」を伴っていることが分かる。次に重要な「胃・腸」はそれぞれ「で」「に」、最下位の「三層錠」は「を」を伴っている。三層錠の場合、マクロ構造との関わりにおいては最下位の地位にあるが、局所的にはきわめて高い密度で集中しており、導入文における主題性は「胃」や「腸」の場合よりも高いとすることができる。そこで、これらの助詞をともなう成分を主題性の大きい順に並べると次のようになる。なお、「糖衣錠」が出現するコピュラ文の述部に関しては、後に述べることにする。

(13) ～は>～が>～を>その他

ところで、Keenan & Comrie(1977)やGivón(1989)は、指示対象が文のどの成分に用いられるかによって予測可能性に差が生じ、主題としての安定性に異なりが生じることを指摘している。それによれば、文の成分を主題性の高い

ものから順に並べると次のような配列になる。

(14) 主題>主格>位格>対格>その他

本稿の調査で得た(13)の配列は、まさに(14)と並行していることが分かる。このように、文の成分のタイプによって、指示対象がどれほど重要な主題としてそれ以降のテキストに出現するかを予想する手掛りが得られるわけである。

以上のことは、「胃」や「腸」の表現形式を見ることによっても裏付けられる。すでに「胃」に関しては、主題性が低いにも関わらず、広範囲にわたって比較的多くの反復が認められることを観察したが、表4によって反復されるとき表現形式を見てみると、デ格・ヲ格・ニ格に限られていることが分かる。また「胃」と同範疇の「腸」の場合もニ、マデ、デ、トを伴うのみで、主題成分や主格成分として用いられることがない。これらの語は省略形式をとらず、ほとんど常に名詞が反復されているという点でも特徴的であったが、文の成分という点から見ても、主題成分や主格成分にならないというはっきりとした現象が観察されるのである。

次に、同一指示対象を表す語が比較的長い距離にわたってテキストに出現している部分を取り上げ、密集部が開始されるときにどのような表現が用いられているかを観察することにした。それによって、主題性の高い語を導入（または再設定）するときにはしばしば用いられる形式が特定できると考えるためである。そこで、表4において4節以上連続した出現が観察される部分を取り出し、表6を作成した。この表によって、指示対象が密集部に出現するときの表現形式を観察することにした。

表6を見ると、長く繰り返される指示対象が現れるのは、圧倒的にコンピュータ文の述部の位置であることがわかる。砂川（2000）はコンピュータ文の述部で表された指示対象が、後続談話で重要な主題となることがきわめて多いことを指摘し、コンピュータ文の述部は後続談話に語り継ぐ主題を特立的に提示して示す働きがあること、そのために主題の導入や再設定の談話機能を果たすものとして利用されることを論じている。表4を見ると、マクロ主題とのかかわりという点では最下位の「糖衣錠」が、かなり長い距離にわたって密集することが観察され、この部分での局所的な主題性がきわめて高くなっていることが分かる。このような高い主題性を保ち得たのは、「糖衣錠」がコンピュータ文によって導入されたことと無関係ではないように思われるのである。

8. まとめ

以上、3つの調査とテキストのマクロ構造分析によって、談話主題の階層性を反映させる言語形式の解明を試みた。その結果、我々は次のようなさまざまな手段を用いて階層的な談話の主題を明らかにしようとしているものであることが明らかになった。

- 1 同一指示語の分布
- 2 同一指示形式の使い分け
- 3 格成分、主題成分のタイプ
- 4 構文のタイプと要素の位置

以上のうち2にかかわる指示詞に関しては、本稿で十分に触れることができなかった。指示詞については、名詞句や省略との使い分けの他にコ系の指示詞とソ系の指示詞の使い分けも解明されなければならない⁵。また、4の構文に関しては、談話を構成する上で存在文や現象文の役割に興味深い問題があることが指摘されている⁶。また、「は」や「って」などの主題標識が談話主題とどのように関わっているのかという問題も、今後に残された興味深い課題である。

注

本稿をまとめるにあたり、本学文芸・言語研究科博士課程の院生諸氏に貴重なご意見をいただいた。ここに記して感謝したい。

- 1) (1b)～(1d)も省略された主題を持つ有題文である。
- 2) 連体修飾節の区切り方は、ベケシュのように内の関係と外を区別せず、どちらも底の名詞の前を切れ目とする。ただし形式名詞の場合はベケシュに従い、形式名詞の後、あるいは形式名詞に続く助詞の後を切れ目とする。
- 3) マクロ主題は(11)のように命題の形を持つと考えられる (Van Dijk 1977)。
- 4) 表2を見ると、警告に関わる語（「まちがい」「きちんと」など）の使用頻度が低く、この部分は要約者によってさほど重要な主題と認識されていないことが分かる。
- 5) ベケシュ (1995)、庵 (1997) などの研究がある。
- 6) 存在文に関しては砂川 (1995) の研究がある。

参考文献

- 庵功雄. 1997. 「「は」と「が」の選択に関わる一要因一定情報名詞句のマーカーの選択要因との関係からの考察」『国語学』188: 134-124.
- 久野暲. 1978. 「談話の文法」大修館書店
- 砂川有里子. 1995. 「談話主題の導入形式に関する研究ノート—存在文とコピュラ文の特立提示機能について」『文藝言語研究（言語篇）』28: 41-51.
- 砂川有里子. 2000. 「文の機能と談話機能—日本語のコピュラ文分析—」筑波大学学内プロジェクト(A)研究報告書「東アジア言語文化の総合的研究」38-74.
- 永野賢. 1972. 「文章論詳説」朝倉書店
- 馬場俊臣. 1986. 「「主要語句の連鎖」と「反復語句」との交渉」『文章論と国語教育』朝倉書店. 68-83.
- 馬場俊臣. 1989. 「原文と要約文の反復語句」佐久間まゆみ編「文章構造と要約文の諸相 第2章」くろしお出版. 35-46.
- ベケシュ・アンドレイ. 1989. 「残存認定単位の規定と出現傾向」佐久間まゆみ編「文章構造と要約文の諸相 第1章」くろしお出版. 18-34.
- ベケシュ・アンドレイ. 1995. 「日本語における照応の語用論—より広い指示手段系列におけるコノとソノ」仁田義雄編「複文の研究（下）」くろしお出版. 481-509.
- Chafe, W. L. 1980. *The Deployment of Consciousness*. In W. Chafe Ed., *The Pear Stories*. Norwood, N. J., Ablex.
- Chafe, W. L. 1987. *Cognitive Constraints on Information Flow*. In R. Tomlin Ed., *Coherence and Grounding in Discourse*. Amsterdam, John Benjamins. 21-51.
- Chafe, W. L. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago / London, The University of Chicago Press.
- Dik, S. 1989. *The Theory of Functional Grammar: Part I*. Dordrecht / Providence RI, Foris Publications.
- Givón, T. 1983. *Topic Continuity in Discourse: An Introduction*. In T. Givón Ed., *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. Amsterdam, John Benjamins. 3-41.
- Givón, T. 1989. *Mind, Code, and Context: Essays in Pragmatics*. Hillsdale, Erlbaum Associates.
- Keenan, E. L. and B. Comrie. 1977. *Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar*. *Linguistic Inquiry*: 8(1): 63-99.
- van Dijk, T. A. 1977. *Text and Context*. London, Longman.